

文化財編



## 一、絵画・彫刻

### 総説

竹野町は山陰海岸の東部に位置し、北は日本海に面し東も西も南も山に囲まれており、ある意味では陸の孤島である。竹野川がつくる大きな谷の左右に、小規模の農業が営まれ、日本海を活躍の場とする漁業の町として存在する。当然文化的にはそれほどの目立ったものがあるとは思えない。ところがこの町には、町とは不釣り合いな規模と歴史を有する観音寺が存在している。この観音寺は現在は真言宗であるが、元は宗派に関与しない観音信仰の寺として、近在の人たちに篤く信仰されていた寺である。また平安時代から鎌倉時代にかけては、強力な勢力をもっていたと思われる蓮華寺があり、室町時代になると山名氏の篤い保護

のもと、この地方の中心寺院となった円通寺もある。さらに、但馬地方の時宗の中心寺院であった興長寺もあり、竹野町という狭い一地区ではあるが、なかなか多彩な顔触れを示している。このような竹野町の歴史から、意外と文化的には孤立した地域ではなく、中央と直結した遺物がいくつつか残されている。その一つの例が蓮華寺にある大日如来図であろう。この大日如来図は、重要文化財として認定されている同種の絵画とほぼ似通った表現を示しており、技術的にも、保存状態から見ても、他の指定品に決して劣るものではない。早急に指定を受けられるよう配慮されたい作品である。

竹野町の寺院は総数一カ寺であるが、現在廃寺となつている寺院も含めれば、竹野には遙かに多い寺院があつたと思われる。しかしそれら廃寺となつた寺院の歴史はわからなくても、前記した寺院を中心として見ていくだけでも、竹野町の政治や文化の激動の歴史を彷彿させる。その激動の

歴史を生き抜いてきた人々と、その人々が営々として保持し続けてきた文化遺産が、今この現代の我々に様々なことを問いかけるのである。

竹野町の寺院の変遷は、先に述べたように大きく変化している。また、単に歴史的な時代の変化だけでなく、宗派の違う寺院の興亡があったために、文化財にしてもいくつかの違った傾向を示している。円通寺のように、どちらかといえば上層の支持者によって作られた寺院と、観音寺のように庶民信仰、もしくは山岳信仰から出発した寺院とでは、おのずとその成立と展開の歴史が違う。当然その所持する遺物も幾つかの特徴を示している。禅宗の頂相画は法脈を大切にする伝統をもつだけに、それぞれ由緒正しきものであるが、それゆえ一般の人々にとっては身近なものではない。しかしあまり興味を引かない絵画ではあるが、残された頂相画の質の高さには目を見張るものがある。さらに蓮華寺の愛染明王図とか十一面観音

像などは、文化財として見ても決して悪いものではなく、十分に指定を受けるだけの名品である。

しかし、美術品を文化財として見るといふ立場に立たないで、それらの作品を見れば、それらの作品は、何か自分たちの世界に近い仏画、仏像として存在しており、自然な信仰の発露ではないのかという気がする。存在そのものが民俗的な匂いのある文化財なのである。日本人の生活と信仰に密着した造形がここに見られるのである。それら民俗的な匂いのする作品を作った精神は、時代は下がってはいっても、地獄図とか薬師十二神将像とかに受け継がれていき、素朴な信仰形態の伝承を我々に感じさせてくるのである。

ところで、わが国の文化財を見ていくと、国宝とか重要文化財といった優れた文化財がたくさん存在しているが、文化遺産というのはそのような指定の有無に関係なく、人類が日々築き上げてきた生活そのものの蓄積の結果である。またその蓄

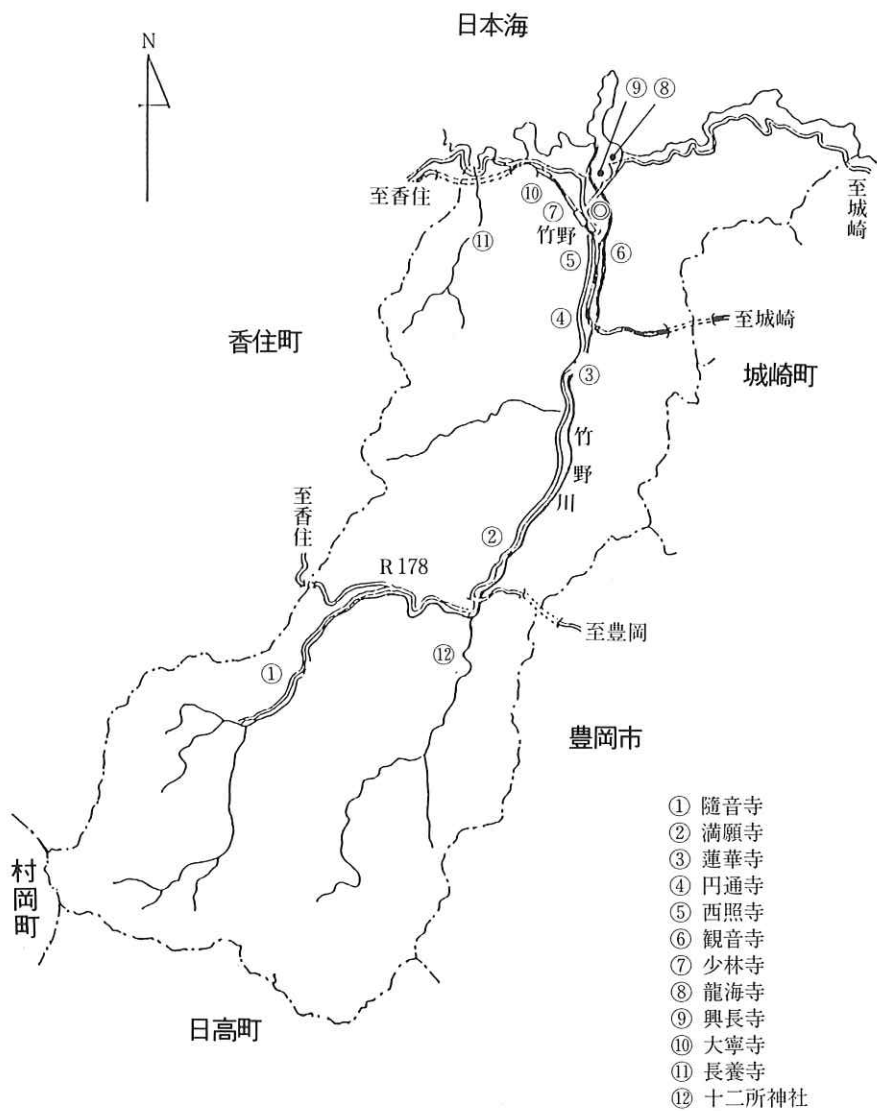


図66 絵画・彫刻調査寺社所在図

積そのものにこそ文化としての意義を見出すべきである。指定された文化財というのは、単にその中の一部が、希少価値があり、また歴史的な資料価値がある、と認められて指定されているにすぎない。わが国には指定を受けていない古い文化遺産が、指定を受けているものの何百倍、何千倍も存在するであろう。ただしそれらの文化遺産は、二級品・三級品として扱われ、文化的には価値がないものとして放置されてきた。しかしそのような文化遺産も大事に保存していけば、五百年先、千年先には、現在の指定された文化財と同じく国民の大事な文化遺産として見直されるであろう。ただし何百年かにわたって守られてきた文化財を、この先また何百年にわたって伝えていくことの難しさを思い巡らして頂きたいと思う。さらに今、生きている人々が歴史の中の一構成員であること認識し、次代に文化遺産を伝えることが、現代人としての一種の義務となっていることを理解し

てもらい、協力して頂きたい。そしてこのような文化財に対して、身近であつてなおかつ大切なものである、との認識を、地元の人々に持つて頂くように盛り上げていくことが、これからの社会教育の基本であろう。その意味で今回の僅かな期間の調査とその報告でこと足りたとはとても思えない。今回の報告は、あくまで前記の認識に立つての調査とその報告でしかない。そのため大まかな文化財の現状把握と、調査対象寺院の文化財に対する認識の啓蒙に努めた。本報告にもその立場は強く出ていると思う。身近な文化財に対する愛情が、先々あらゆる文化の発展にとつての第一歩であると確信しているので、この調査がきっかけとなって、町の文化財に対する認識が、少しでもいい方向へ向かうことを願っているし、そうあつてほしいものである。

どの地方にいつても、指定対象外とされた文化財は調査さえも満足にされておらず、どの寺にど

のようなものがあるのかを教育委員会でも聞いても、専門外ですからなどという返事しか返ってこない。しかしこれが文化遺産に対する現状なのである。何故かというと、それは文化というのが、政治改革や経済変動といったものと違って、我々の生活に直接的な利害を及ぼすものではないと思われているために、おおむね無関心でいても大して支障はない、と漠然と感ずることによる。しかし人間の生活の基盤は、個人のレベルで考えれば、実際には政治がどのように動こうが余り関係がなく、自分の生活の回りにおこる出来事や、自分自身の教養の高低そのものに、重大な関心があることに気がつくはずである。ところがそのような個人的で末梢に思える部分的な事象の集大成そのものが、実は「文化」というものの全体なのであることに気付く人は少ない。それゆえ一国の文化のレベルを高めるといふことは、実は個人の生活そのもののレベルを高めることと同義のはずである。だから

からこそ、その第一歩として、まず自分たちの身近な所から、生活の本当の質の向上のための努力を開始しなければならぬし、また努力を開始して頂きたい。その活動の一つとして、取敢えず身近な文化遺産に対して、現状の再認識から出発するのも一つの方法であると思う。

竹野町内寺社の絵画・彫刻

一、 聖観音菩薩座像

一体

所有者 円通山随音寺

所在地 須野谷

時代 江戸時代中期

像高 三九センチ  
メートル



写266 聖観音菩薩座像

竹野町では最も南に位置する随音寺の本尊である。臨済宗に属し円通山の山号でも分かるように、須谷の円通寺の末寺である。本尊は臨済宗の本尊にふさわしい聖観音像であるが、寺の歴史から見ればそれ程古いものではない。元々この寺の創建

は臨済宗としてではなく、天台宗であったと伝えられている。それが応永十六年（一四〇九）に禪宗に改宗したとあるので、この改宗の時の本尊が今も残っていると考えたのであるが、残念ながらこの像は、江戸時代も中期ごろに新たに施入されたものと思われる。

二、 薬師如来座像

一体

所有者 円通山随音寺

所在地 須野谷

時代 室町時代初期

像高 一三五センチ  
メートル

随音寺の本尊ではないが、この寺には本尊よりも古い薬師仏がある。元薬師堂にあったと伝えられている薬師如来座像で、天台宗麻野山施薬寺、または朝野山施薬院と称した寺の本尊であった。寺伝では丈六仏と言われてきたが、現在の仏像の大きさからは半丈六仏といわねばならない。



膝の部分や左手部分は後補の跡があり、目の部分は明治以降に彩色されたと考えられる補彩も見られる。元禄時代に修理したという記録もあり、現在も左肩より左腕にかけて、下塗り彩色の上に紙を貼り、上塗り彩色をし直した元禄の修理の跡が、剥離して少しみすぼらしくなっている。



写267 薬師如来座像

しかし檜材の四枚継ぎで作られたこの薬師如来像は、この寺の臨済宗としての歴史よりも古い。制作年代は不詳の仏像であるが、おおむね定朝様式を受け継いでいる。ただし全面にわたって金泥等の補修があり時代判定は困難を極める。寺伝等

の諸事情を勘案すれば、南北朝から室町中期の頃に、定朝様式にのっとって模作された薬師仏とするのが妥当であると考えられる。

### 三、阿弥陀如来立像

一体

所有者 瑠璃山満願寺  
所在地 坊岡  
時代 江戸時代末期  
像高 七九センチメートル



写268 阿弥陀如来立像

臨済宗南禅寺派の寺院であるが、元は真言宗で轟の蓮華寺の末寺であったと考えられる。この寺の本尊は山号瑠璃山から想定すれば薬師瑠璃光如

来が最もふさわしい。しかし現在のの本尊は阿弥陀如来像で、しかもこの阿弥陀像は、二蓮の蓮に乗る形式をとっていることから、浄土宗系の仏像と考えてよい。なぜこのような形式の仏像を江戸時代も末期頃に新たに購入したのかは不明である。

四、紙本著色 涅槃図

一幅

所有者 瑠璃山満願寺

所在地 坊岡

時代 江戸時代前期

元禄三年（一六九〇）

法量 一六六×一三三センチメートル

作者 狩野友信

涅槃図としては中型のもので、彩色も普通のごく標準的な作例である。涅槃図の裏に

丹後州坂井邑 狩野友信 元禄三年

とあり、また箱書には

開基 津祢鹿重利号満願寺殿

弘長二壬戌七月一日今至干元禄十五年

壬午年凡四百四拾二年

開山 山門

とも記されている。元禄三年に狩野友信によって描かれたものである。



写269 涅槃図

ただし、狩野派で友信と言えば、明治時代に東京美術学校開校当初の教授をした人物しか記録に残れてこない。当然元禄では時代があわないし、出身地も江戸ではなく丹後であるから、たぶん京狩野の流れをくむ人物であろう。時代から見れば

狩野山雪か永納の弟子であったと推定出来るが、この狩野友信なる人物の経歴は不詳であるとしかしいようがない。

五、紙本著色 高僧図

三幅対

所有者 瑠璃山満願寺

所在地 坊岡

時代 江戸時代

法量 八八×三七イセンチ

三幅とも貞徳元年辛巳の年号が入っているが、この貞徳という年号は日本年号でも中国年号でもない。朝鮮年号らしいが、今は辛巳の年号から一応一七六一年が最も可能性が高いのではないかと思っっている。右から作者と作題が

坤堂仙清図 印 皆勢八月仲旬

〃 印 晩夏仲日圓之

〃 印 季夏仲旬

とあって、三人の高僧を描いている。箱書には



写270 高僧図

是先師所購求而永可為当寺什物者也

明治十年一月

物津誌

と記されており、江戸時代後期頃に満願寺の住職が購入したものであろう。

六、木版 大般若経

六百卷

所有者 瑠璃山満願寺

所在地 坊岡

時代 江戸時代前期

延宝五年（一六七七）



写271 大般若経

延宝五年銘の木版大般若経六〇〇巻である。江戸時代前期のものとはいえ、全巻揃っていることに意義がある。

七、十一面観音菩薩立像

一体

所有者 峰山蓮華寺

所在地 轟

時代 室町時代初期

像高 一六六センチメートル



写272 十一面観音菩薩立像

蓮華寺本堂の本尊十一面観音菩薩像である。江戸時代前期に火災のため山内八坊は総て焼失した

とある。本堂も類焼し本尊も焼失してしまったため、山外にあった寺院本尊を現本尊として祀ったとのことである。移転後の修理と思われる跡があるが、これは随音寺の修理と同じと思われる人物の手によって修理がなされたようである。一見すれば江戸時代の作に見えるのはこの修理のためである。眼の部分も上部の塗装が厚すぎるため、実際の眼の部分が小さくなってしまいうような、どちらかと言えばまずい修理がおこなわれてしまった。ただそれは、現代の修理がうますぎるために、比較して見ればへただということだけのことである。また江戸時代頃の修理の基本的な考え方が、信仰を最優先しているため、ともかく外見上美しく仕上げればよい、というのが時代の流れであった。そのような風潮からみて、江戸時代の修理をした仏師を一概に責めるのは気の毒であらう。

像全体を厨子から出している調査は出来ていないが、等身大の十一面観音像で、頭部から腰のあた

りまでが拝見できる。全体の印象としては、十一面観音としては厳しさが少し欠けているように見えるのは、後の修理に原因があるのかも知れない。しかし、肩から腰にかけての基礎的な造作については、いわゆる平安時代の作り方ではあるが、地方作という感じが漂うのは、着衣や摺の彫り方が素朴なためであらう。顔と胴の比率も少しバランスが悪いこと等から、確定的な時代推定は不詳であるが、南北朝から室町時代初期の作とするのが妥当なのではないかと考えている。

八、絹本着色 大日如来図 一幅

所有者 峰山蓮華寺

所在地 轟

時代 鎌倉時代前期

法量 八〇×三九・五メートル

五智宝冠をかぶり、金剛界智拳印を結ぶ大日如来の単独仏を描いている。この作例は、細かい部

分まではわからないが、東京国立博物館所蔵の重要文化財「一字金輪像」と、構図に関していえば全くと言っていいほどそっくりである。切金の文様も非常に細かい細工で、その文様の種類も亀甲文・雷文・四菱文・網目文と多種多様である。線描の細かい技巧を別にすれば、切金文様に少しずつズレがあることで、鎌倉期よりも平安時代の切金細工の趣がある。この画像は、元京都東寺のものであったと伝えられているが、鎌倉時代前半の作として納得出来るだけの力強さと内容を示して



写273 大日如来図

いる。箱書裏銘に

奉寄付大師御請来大日尊 施主瀧村

弥勒寺中興甫仙大和尚

享保年九辰三月廿一日

とあり、享保九年（一七二四）に修理が行なわれたと考えられる。しかもこの時の修理は原画を壊さないように配慮され、また以後の保存にも慎重な配慮がなされたため、鎌倉時代の絵画としては保存状態も比較的良好である。

### 九、愛染明王図

一幅

所有者 峰山蓮華寺

所在地 轟

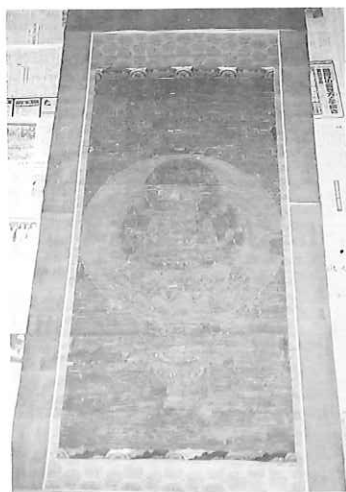
時代 鎌倉時代後期

法量 八四×四〇・八センチメートル

作者 伝 鳥羽僧正

赤色の日輪を背にし、全身赤色の六臂愛染明王図である。絹本の様相は大日如来図と同じものと

考えられるが、金の部分が切金ではなく大部分が金泥書で描かれている。さらに切金文様の部分を比較して見れば、大日如来図と比較して技術的に少し落ちているといわざるをえない。愛染明王自体の構図は標準的な儀軌にのっとって作られたもので、また絵画としての技巧についても優れた感性を感じさせるが、文様も雷文だけしか使用されておらず、蓮弁や火炎部分の表現も大日如来と比較すればどうしても見劣りしてしまう。しかし作品全体をおおう力強さには見るべきものがあり、



写274 愛染明王図

美術史的な観点からも重要な作例であることは間違いない。

制作時期としては鎌倉時代の作例であることは間違いないが、時代としてはすこし下がった南北朝に近い鑑倉後期の作品と見るのが妥当なところであろう。背景の朱の部分は比較的良く残っているが、褪色も進み、保存状態もあまりいいとは言えず、早急な保存処置が望まれる。

一〇、絹本着色 釈迦三尊並びに十六善神図

一体

所有者 峰山蓮華寺

所在地 轟

時代 桃山時代

法量 九三・一×三九・六メートル

大般若経六百卷と共に雨乞い祈禱の時に使用されたためであろうか、制作年代から見れば保存状態はいいとはいえない。しかしこれは祈禱時の本

尊として実用に供されてきたためで、鑑賞用の仏画ではなく、仏画が実用品として生きていた時代の証明となろう。



写275 釈迦三尊並びに十六善神図

釈迦を中央にして、左右に文殊と普賢、さらに左右に各々八善神を配置し、中央下部に別に鬼神を含む四神を描いている。構図としては一般的なものである。使用された絹本は細かく、縦糸は全体に波打っており、古さを感じさせるわりには意外と新しい制作になるのかもしれない。室町後期の戦国時代から江戸時代初期にかけての間の制作であろう。

一、紙本著色 高野四社明神図 一幅

所有者 峰山蓮華寺

所在地 轟

時代 江戸時代

法量 九三×三九・三センチメートル



写276 高野四社明神図



図67 四社明神と本地仏



高野山天野社に祀られる地主神等の四社を描いている。その名と本地関係は図67のごとくである。四社の内三社は祭神がはっきりしているが、第四の明神名は決まっていないようである。しかしその形態から弁天さまとして認識されてきたことは間違いない。元々丹生明神は高野山に祀られていた神様であるし、高野明神または狩場明神は、弘法大師を高野山に導いた伝説の人物である。高野山信仰の絵画であるから、本地関係も先の説明図のとおりであるが、絵画としては本地垂迹思想にのっとり作られた垂迹曼荼羅と言える。そのため人物はおおむね日本の衣装を身にまとっている形をとる。

一二、紙本著色 両界曼荼羅図 二幅

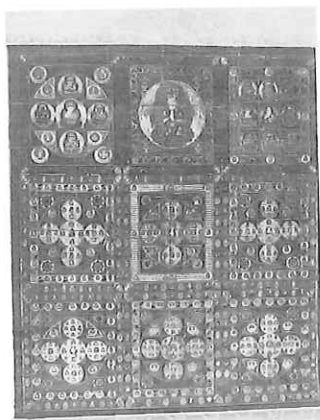
所有者 峰山蓮華寺

所在地 轟

時代 江戸時代

法量 七八×六四・七センチ  
メートル

両界曼荼羅は、金剛頂経を元にした金剛界曼荼羅と、大日経を元にした胎藏界曼荼羅がある。本来は伝法灌頂の時に壇の上に敷かれて使用するのであるが、現在は軸装で仏壇に向かって左右に配置する。真言宗では仏教の宇宙観を示す絵画として特に大切にされてきた。



写277 両界曼荼羅図の内金剛界

蓮華寺の両界曼荼羅図の制作時代は江戸時代であり、作品もそれほど大きくない。通常の曼荼羅図であるが、手抜きせずに原図の両界曼荼羅の雰

困気を誠実に守っている。

一三、紙本墨彩 白衣観音図 三幅対

所有者 峰山蓮華寺

所在地 轟

時代 江戸時代初期

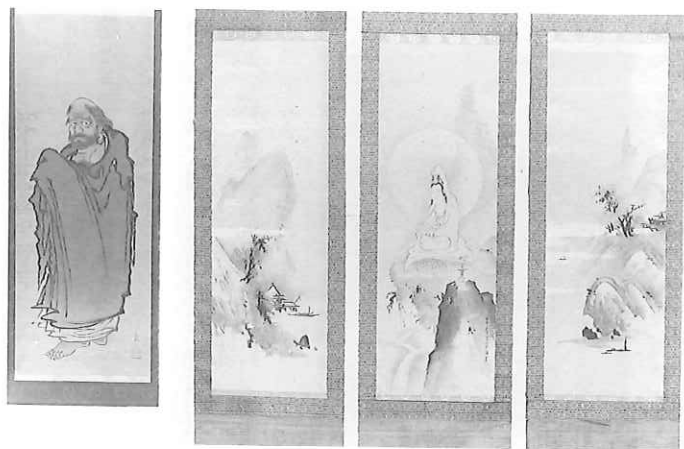
作者 雲谷等蟠

三幅対の白衣観音図であるが、その中央の図の右下に

雪舟六世雲谷法眼等蟠筆

と銘が入っており、銘の通りならば、桃山時代の有名な画家の一人雲谷等顔の弟子ということになる。ただし、雲谷派の絵画としては少し線の表情が優しすぎるような気がするが、作品全体を覆う気品や筆づかいは並々ならぬものがあり、江戸時代も初期の作品としてよかろうと思う。また、円通寺所蔵の達磨大師図にもこの雲谷法眼等蟠の

銘が入っている。この作品の方が雲谷派らしい筆づかいを感じる。



写278 白衣観音図と達磨大師図

一四、華嚴釈迦座像

一体

所有者 萬年山円通寺

所在地 須谷

時代 室町時代初期

応永三十五年（一四二八）

像高 六一センチメートル  
作者 定弁



写279 華嚴釈迦座像

竹野町の臨濟宗では中心寺院であった円通寺の本尊である。南禅寺派中本山の格式をもつ円通寺は、後に記す月庵禅師によって開かれた寺院で、奥但馬を支配した山名氏の厚い保護のもと、室町

時代には最も隆盛な時期となり、多くの末寺を持つに至っている。この寺の本尊も、禅宗寺院にしか見られない「華嚴の釈迦」像を本尊にしており、寺院成立の歴史からも正当性を感じさせている。仏像の裏銘に

高辻富小路京極之間

仏所作者太夫

法眼定弁

応永三十五年 四月十八日 誌之

とあって、室町時代初期に法眼定弁によって作られたものとわかる。本仏像自体は本堂（開山堂）に祀られているが、かなり高い須弥壇に鎮座しておられるため、よくは観察出来なかった。

一五、塑像 山名時義像

一体

所有者 萬年山円通寺

所在地 須谷

時代 江戸時代初期



写281 山名時熙像



写280 山名時義像

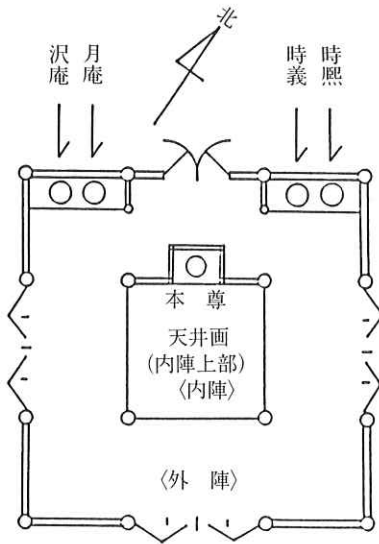


図68 円通寺開山堂(本堂)堂内配置図

正面から見て外陣右側から、山名時熙・山名時義・月庵・沢庵和尚の順で並んでいる。内陣

と左記のようになる。  
 円通寺開山堂の中に祀られているのは、四体の頂相塑像である。それぞれの位置関係を示しておく

像高 八四センチ  
メートル



写283 沢庵和尚像



写282 月庵禅師像

の天井には、「鳴き竜」の絵が描かれており、その内陣の本尊として華嚴の釈迦が座しておられる。開山堂の形式および内容から見ても、ありし日の円通寺の栄光ある日々を彷彿させてくれる。開山堂は一辺が約五間の正方形の建物である。

一六、塑像 山名時熙像

一体

所有者 萬年山円通寺

所在地 須谷

時代 江戸時代初期

法量 七六センチ  
メートル

円通寺開基の山名時義の子で山名時熙（ときひろ）の塑像である。

一七、塑像 月庵禅師像

一体

所有者 萬年山円通寺

所在地 須谷

時代 江戸時代初期

像高 一〇三センチ  
メートル

一八、塑像 沢庵和尚像 一体

所有者 萬年山円通寺

所在地 須谷

時代 江戸時代初期

像高 七九センチメートル

竹野町の歴史から見て、室町時代の中心となる寺院は、当時の守護職であった山名氏の帰依を受けた円通寺である。その山名氏の中で、寺院との結び付きを強めたのは山名時義と時熙である。父子二代にわたっての篤い信仰を生んだのは、円通寺の開山月庵禅師の人徳によるものである。また、江戸時代に入ってから円通寺を支えた人物としては沢庵和尚がいる。円通寺を開き、支え、発展させたこの四名を、円通寺本堂（実際は開山堂で本堂は別にあつたが、今は本堂がないので、開山堂を本堂としている）に祀つたものである。総て塑像の頂相で、江戸時代初期頃に作られたものかと思われる。時義と月庵はやや大きめに、時

熙と沢庵はやや小さめに作られている。個々の人物の持味を、落ち着きや力強さ格式等で実にうまく表現し、衣紋の文様も丁寧を描かれている。塑像の頂相としては優秀な作品群である。

一九、板墨絵 天井画 一枚

所有者 萬年山円通寺

所在地 須谷

時代 江戸時代中期



写284 天井画

本堂天井に描かれたいわゆる「鳴き竜」である。

狩野派の絵を学んだ人物かと思われる細田周岳が描いている。周岳については通史編第六章第二節を参照されたい。

二〇、紙本着色 涅槃図 一幅

所有者 萬年山円通寺

所在地 須谷

時代 江戸時代後期

法量 二四〇・七×一七〇・三メートル



写285 涅槃図

竹野町では観音寺に次いで大きい涅槃図である。作品の大きさの割に彩色は淡彩であるが、緑青や群青の岩絵具を多用し、金泥書きの作品である。紙は厚手のものを使用しているので、鳥の子紙かと思えるが、どうも麻紙を使用したようである。人物・樹木・動物総てに亘って手抜きのない丁寧な描写で、樹木等の表現に狩野派的な影響が見られる。絵具の粒子の荒さや、褪色の度合いから見て、制作年代は江戸時代後期の作になるのではないかと考えている。

二一、絹本着色 月庵禅師図 一幅

所有者 萬年山円通寺

所在地 須谷

時代 室町時代前期

永徳三年（一三八三）

法量 九六×四〇・三メートル

月庵宗光禅師を描いた頂相画で、県指定文化財

である。図上部に

廊清五蘊

吞尽十方

青山不老

白日茫茫

石慶法大行写

予真以我贊

一語与之耳

永徳癸亥半夏日月庵宗光書



写286 月庵禪師図

と八行の讃があり、永徳三年（一三八三）に月庵宗光自身の讃が入っていることで、月庵五十八歳の時のものであることがわかる。月庵は美濃国の出身で、南禅寺で修行した高僧である。塑像の月庵像と比較すれば、かなり細身であるが、突き出た顎の表現や長い眉毛に、生存中に描いただけの

写実性が窺える。室町時代の頂相画としても傑出した絵画と言える。

二二、紙本着色 沢庵大和尚図 一幅

所有者 萬年山円通寺

所在地 須谷

時代 江戸時代初期

慶安三年（一六五〇）

法量 一〇七×三六・五センチメートル

慶安三年の讃が入った沢庵和尚図である。江戸時代初期の寛永年間に活躍した人物で、多くの寺院を開いたり再興したりした。その風貌からも、活動家としての精力的な人物像が窺える。



写287 沢庵大和尚図



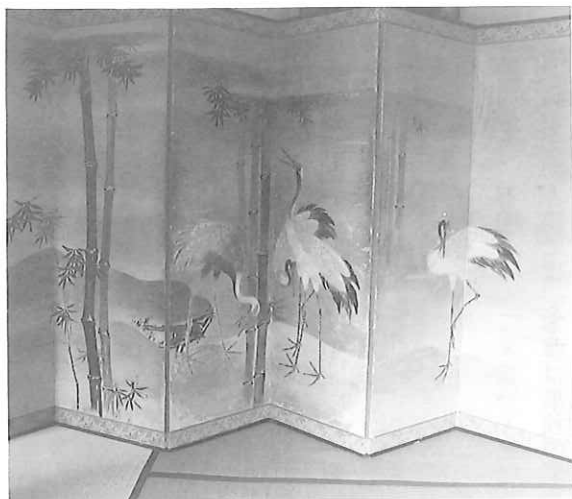
二三、紙本著色 松竹に鶴の図屏風

六曲一双

所有者 萬年山円通寺

所在地 須谷

時代 江戸時代末期



写288 松竹に鶴の図（部分）

法量 一六五・五×三五八センチメートル

作者 狩野正栄

法橋狩野正栄の手になる六曲一双の屏風絵である。狩野正栄なる人物の経歴は不明であるが、正当な狩野派の流れをくむ人物であることは、その描かれた図様を見てもよくわかる。江戸時代後期から末期にかけての作と見られる。

二四、阿弥陀如来立像

一体

所有者 栄雲山西照寺

所在地 和田

時代 江戸時代中期

像高 五二センチメートル

浄土真宗本願寺派にぞくする西照寺の本尊、阿弥陀如来立像である。ごく普通の来迎形の仏像である。真宗系の阿弥陀如来であるので、光背の部分が四八本の光明を発する形をとる。江戸時代中期の作例かと思われる。

二五、祖師図

所有者 栄雲山西照寺

所在地 和田

時代 江戸時代末期

法量 不明（一一二×五一・五センチ）

一幅



写289 阿弥陀如来立像

浄土真宗系の寺院では、本尊は単独の来迎形の阿弥陀仏であるが、その阿弥陀仏とともに真宗では最低限必要な絵像がこの祖師図と蓮師図である。祖師すなわち真宗開祖の親鸞上人と、蓮師すなわち真宗中興の祖蓮如上人である。真宗の創始者である親鸞上人の絵像は、鏡の御影や安城の御影と

呼ばれる肖像画があるが、一般的に真宗寺院に掛けられるのは、熊皮の御影と呼ばれる絵で、鎌倉時代に作られた絵を元にした複製画である。西照寺にある絵画はいずれも比較的新しい制作になるもので、文化財としてはそれほどのものではないかも知れないが、信仰の対象として大切にされてきたことに意義がある。

二六、蓮師図

所有者 栄雲山西照寺

所在地 和田

一幅



写290 祖師図

時代 江戸時代末期

法量 不明(一一・二×五一・五センチ)

蓮如上人は、戦国時代の一時期に、加賀の国を中心に一躍有名になった一向門徒のリーダーであり、真宗を実質的な全国組織にしたてあげ、豊臣秀吉と互角に戦った石山本願寺の門主でもあった。一向一揆の精神的な支えともなり、現在の真宗が存在するのも、真宗の中興の祖であるこの蓮如上人の存在が非常に大きい。そこでこの二人の上人像を絵像として「脇侍仏」扱いするのが一般的である。



写291 蓮師図

二七、聖徳太子図

一幅

所有者 栄雲山西照寺

所在地 和田

時代 江戸時代末期

法量 一一・二×五一・五センチ

聖徳太子の若かりしころの姿を描いた図であるが、真宗系の寺院では一般的に所蔵されている仏画である。胸元等に使用された銀色の切金が、色の変色もしないで残っていることから、プラチナ箔を使用した可能性もある。これは七高祖図も同じである。ただし、この時代にプラチナ箔が使用された例があるのかどうかは疑問である。



写292 聖徳太子図

聖徳太子は日本に仏教を興隆させた第一人者であるという理由だけでなく、真宗では特に厚く信仰されている。それは親鸞上人が比叡山で修行のとき悟れないでいたときに枕元に現れて、浄土の信仰すなわち阿弥陀の本願にすがることが告げた、という故事により、親鸞の浄土教開眼に力を貸した大切な人物とされているからである。

二八、七高祖図

一幅

所有者 栄雲山西照寺  
所在地 和田  
時代 江戸時代末期  
法量 一一二×五一・五センチメートル



写293 七高祖図

浄土真宗開祖の親鸞上人に至る浄土教の祖師達を、インド・中国・日本の順に一幅の絵画にしたもので、真言八祖図等と同じ主旨に基づいた絵画である。浄土真宗の場合は、

(インド) 龍樹・天親 (中国) 曇鸞・道綽・善導 (日本) 源信・源空  
である。

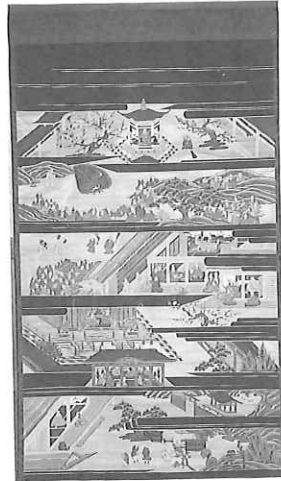
二九、御絵伝図

一幅

所有者 栄雲山西照寺  
所在地 和田  
時代 昭和十七年  
法量 一三四×七八センチメートル

親鸞上人の生涯を絵解きするために描かれた掛軸装の絵伝である。通常四幅の掛軸で、親鸞がどのようにして絶対他力の信仰に至ったかの経緯を、次々と絵解きの手法で布教出来るように作られた

絵画である。報恩講の時にこの絵をもとに絵解きの説教が今でも行なわれているところが多い。



写294 御絵伝図

西照寺の御絵伝は昭和の作であるが、絵解き説教が行なわれるためには無くてはならない仏画である。

三〇、十一面観音菩薩像

所有者 荆木山観音寺

所在地 羽入

三一、不動明王像

所有者 荆木山観音寺 塔頭金亀院

所在地 羽入

三二、不動明王像

所有者 荆木山観音寺 塔頭両界院

所在地 羽入

前記三体の仏像はそれぞれの本尊であるが、いずれもが秘仏扱いで三十三年に一度しか開扉されない。しかも過去の開扉時期においても開扉されなかったため、現在の生存者のだれもがその存在を確認していない。ただし、観音菩薩像は平成四年が三十三年に一度の開扉期にあたる、と聞いている。

三三、紙本著色 涅槃図

所有者 荆木山観音寺

所在地 羽入

一幅

時代 江戸時代中期

寛保三年（一七四三）

法量 二九九×二一四メートル



写295 涅槃図

麻紙四枚継ぎの大作である。竹野町の中では最も大きい絵画である。寛保三年に京都寺町松原下の表具師と考えられる長谷川氏に依頼して、絵師に制作してもらったものということや、当時の金額で「(総)銀参百五十匁・表具代銀四百拾匁・地絹代銀貳百匁・絵絹三枚代銀百拾匁」であったことが寄進文書や裏書きからわかる。

紙本金泥描きで、絵具の発色度や使用法、および文様の表現方法等に近代的な様相を見せている。制作年代は、平成二年に修理が完成したために明治以降の作と見間違えるほどであるが、裏書きにより江戸時代中期の作ということがわかる。観音堂における涅槃会の本尊である。

### 三四、龍樹菩薩立像

一体

所有者 荆木山観音寺 塔頭金亀院

所在地 羽入

時代 室町時代前期

像高 六〇・五メートル



写296 龍樹菩薩立像

弘法大師作と伝えられるが、これはとても信じられない。また、地藏菩薩とも伝えられてきたように僧形像である。しかしこれは僧形イコール地藏という発想によるものであるから、龍樹菩薩像でよからうと思う。本尊の後ろに隠れるように置かれていたのであまり目立たないが、室町時代前期まで遡れるすぐれた仏像である。

三五、十一面観音菩薩立像

一体

所有者 荆木山観音寺 塔頭両界院

所在地 羽入

時代 室町時代初期

像高 八三センチ  
メートル

両界院は文安四年（一四四七）に火災にあつて  
いるが、天正年間の秀吉山陰攻めの時に再度焼失  
している。文禄元年に再建されたが、さらに寛文  
二年に焼失し、寛文七年に再建されたと記録にあ  
るので、同年（一六六七）に再び建替えられたと



写297 十一面観音菩薩立像

いうことになる。しかしこの十一面観音菩薩は、  
それらの度重なる火災をくぐりぬけて、室町時代  
の面影のままに立っておられる。八三センチの小像  
ではあるが、金亀院の龍樹菩薩像とよく似ている  
作りであり、可能性としては同一作者の手になる  
とも考えられる。

三六、矜羯羅・制陀迦立像

各一体

所有者 荆木山観音寺 塔頭両界院

所在地 羽入

時代 室町時代前期

像高 矜羯羅・五〇センチ  
メートル

制陀迦・四八センチ  
メートル



写298 矜羯羅(右)・制陀迦(左)立像

両界院の本尊は秘仏ではあるが不動明王像と伝えられている。この不動明王は眷属として八大童子を率いている。その八大童子とは

- 慧光童子
- 特徳童子
- 慧喜童子
- 烏俱婆迦童子
- 阿耨多童子
- 清浄比丘

矜羯羅童子 制陀迦童子

である。この八大童子の内の矜羯羅・制陀迦の二像が不動の脇侍としてよく用いられる。

前記八大童子の名称は、中国の「聖無動尊一字出生八大童子秘密法品」という經典に記されたものであるが、八大童子の名前からしても明らかに中国の偽経である。日本でもこの偽経をもとに八大童子のことを説明するが、本尊である不動明王の信仰は、どちらかといえば中国よりも日本独自の信仰と考えた方がよいようである。

日本での不動明王の強い信仰は、空海・円珍の平安時代以後である。その空海はもともと修験道と深い関係があった。その修験道の中心仏が蔵王権現となったように、真言宗も力強くて、いかにも悪を祓い清めてくれるような不動明王像は、庶民信仰から見れば祈禱寺の本尊としては格別のものであったようだ。この不動の靈験の補佐をする脇侍として、なぜ矜羯羅・制陀迦が選ばれたのか



は不明であるが、その源はすでに庶民信仰において、寺を維持し守護発展させるための脇役的な仕事をする人達、例えば聖とか勧進僧とか放下僧とか花衆とかいう人達の自尊心にあるのではないかと思っている。というのはその人達が行なっている仕事は、それこそ脇役ではあっても必ず宗教活動に必要なものであり、その自負心がそれぞれの本尊の脇仏や脇侍に自分達をダブらせたものと想像出来るからである。その仕事の内容と各々の尊像の使命とを、日本独自の解釈で決定していったところに、庶民信仰のしたたかさ、日本の民間信仰の根強さを感じるのである。この矜羯羅・制陀迦像も、そういった宗教が生きていた室町時代の精神が込められているようで、なかなかの優秀な作品と言えよう。

三七、紙本墨書 大般若経 残欠  
所有者 荆木山観音寺 塔頭両界院

所在地 羽入  
時代 鎌倉時代初期  
建久七年(一一九六)  
法量 二六・五センチ(幅)



写299 大般若経(残欠部分)

建久七年の銘が裏書きされている大般若経「卷四三九」の残欠である。本来は巻物としてあったものであるが、今はそれぞれの紙が離れていて、一見しただけでは大般若経の一部であることも判らなくなっている。

三八、聖観音菩薩立像

一体

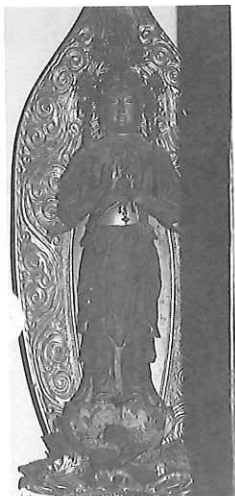
所有者 円覚山少林寺

所在地 草飼

時代 江戸時代中期

像高 四六センチメートル

本尊聖観音菩薩の立像である。江戸時代中頃の作であるが、聖観音らしい優しさのある表情が好ましい。



写300 聖観音菩薩立像

三九、紙本墨画 竜虎図

六面

所有者 円覚山少林寺

所在地 草飼



写301 竜虎図 (部分)

時代 江戸時代中期

法量 一七一・五×九二・五センチメートル

作者 閻圭

現在無住になっている少林寺ではあるが、江戸時代にはしっかりと住職のもとに運営されていたのであろうか、幾つか見るべき障屏画が残っている。この竜虎図もその一つで、竜虎を簡潔な筆使いで描いている。虎図の右端に「法橋閻圭」の銘が入っているが、閻圭なる人物の経歴は不明で

ある。狩野派系統の人物と考えてよからう。



図69 少林寺障屏画配置図

四〇、紙本淡彩 琴棋書画図

四面

所有者 円覚山少林寺

所在地 草飼

時代 江戸時代中期

法量 一七一・五×九二・五センチメートル

紙本淡彩の琴棋書画図であるが、画面構成上や筆づかいに、裏面の竜虎図と共通点が多く、銘は入っていないが同一作者の手によるものと考えてよからう。保存状態が双方共良くないので、早急な保存処置が講ぜられるべきであらう。

他にも閣圭作の紙本著色達磨大師図（一三二・二×五三）一幅がある。



写302 琴棋書画図（部分）

四一、紙本著色 蝦蟇・鉄拐図 二幅対

所有者 円覚山少林寺

所在地 草飼

時代 江戸時代後期

法量 一三二・五×五三センチメートル

江戸時代の作になるもので、京都知恩院蔵の中

国元時代の作家顔輝の蝦蟇<sup>がま</sup>・鉄拐<sup>てつがひ</sup>図を模したものと考えられる。道教的な世界の二人の仙人を描いたものである。



写303 蝦蟇(左)・鉄拐(右)図

四二、十一面観音菩薩立像

聖観音菩薩立像

阿弥陀如来立像

所有者 賀嶋山龍海寺

一体 一体

所在地 東町

時代・像高とも不詳

寛永七年(一六三〇)から貞享四年(二六八七)

まで五七年間は時宗寺院であったが、現在は真言宗の寺院である。この龍海寺の本尊は、三つの厨子にそれぞれが安置されるという特異な構成もつが、これは近くの慈眼院・神通寺・龍海寺の三カ寺が合祀されたために起こったものである。それぞれの元の寺と本尊との関係は

慈眼院 十一面観音菩薩立像 正面中央

神通寺 阿弥陀如来立像 向かって右

龍海寺 聖観音菩薩立像 向かって左

である。

元慈眼院の本尊であったと称せられる十一面観音菩薩立像は、恵心僧都源信の作と伝えられている。身の丈一二〇センチの像で脇仏に將軍地藏と毘沙門天を従える三尊形式をとることである。

ただしこれらは総て秘仏になっており、現実に拝

見する機会是与えられなかった。

四三、十一面観音菩薩立像

一体

所有者 賀嶋山龍海寺

所在地 東町

時代 室町時代中期

像高 一四六センチメートル



写304 十一面観音菩薩立像

三十三観音の中心に立つておられる観音像であるが、脇侍仏の三十三観音は後世になってから揃えられたものである。頭部には十一面の内三面だけが残っている。寄木で玉眼が入った本格的な仏

像ではあるが、腹部から下の部分のバランスから見て、室町時代も中期頃の作と考えたい。

四四、紙本著色 一心十界図

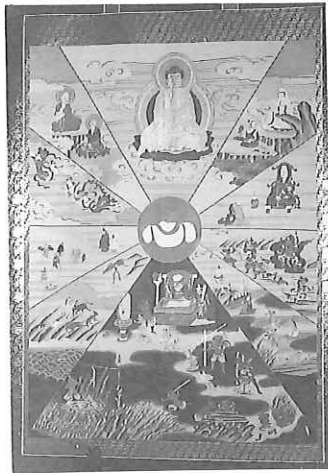
一幅

所有者 賀嶋山龍海寺

所在地 東町

時代 江戸時代末期

法量 一六八×一二八センチメートル



写305 一心十界図

この一心十界図は、浄土宗系の六道絵や地獄図に対抗する形で、主として真言宗で使用される絵

画である。特徴は画面中央に「心」の字がかかれることで、この心の字を中心として地獄や極楽の世界を描いている。使用目的は次の地獄図と同じく絵解き説教のためのものである。制作年代は江戸時代末期と比較的新しいものであるが、仏教の輪廻思想が生きていた時代の証となる貴重な遺物である。

四五、紙本着色 地獄図

一幅

所有者 賀嶋山龍海寺

所在地 東町

時代 江戸時代末期

法量 一六七×八九センチ  
メートル

先の一心十界図と同じ時期に絵解き説教用として購入されたもので、龍海寺では孟蘭盆会を中心とした法会の時に、地獄の恐ろしさや人間の業の深さを説いて、死後地獄落ちは必定なことを感じさせ、仏教の救済が必要だと説教したのであろう。

図様自体は仏教でいう八大地獄を描くというよりも一般的に知られている地獄の責め苦を中心に一般受けを狙った易しい構成となっている。



写306 地獄図

四六、阿弥陀如来立像 三尊形式

脇侍 観音菩薩立像 勢至菩薩立像

所有者 海林山興長寺

所在地 東町

時代 江戸時代末期

像高 八一センチ  
メートル

観音菩薩立像

五一センチ  
メートル

勢至菩薩立像

五一センチ  
メートル



写307 阿弥陀如来立像

浄土教の一派である時宗の寺院である。時宗は一遍が始めた遊行中心の宗派で、踊念仏や百万遍念仏として各地の文化に大きな影響を与えてきた。この地の興長寺も中世から近世にかけては、但馬地方の時宗の中心寺院として存在したのであるが、明治の火災でほとんど灰になってしまった。本堂は明治三十九年に再建されたが、この寺の歴史は鎌倉時代後期にまで遡れる歴史を有している。その証拠の一つとして、念仏勧進のために着用せられた室町時代の阿弥衣が残っていることだけでも

充分であろう。

本尊は来迎形の阿弥陀三尊立像で、脇侍は観音と勢至菩薩がともに来迎の形で立つておられる。寺伝では明治の火災時に本尊だけは持ち出せたといっている。台座と光背は江戸時代のものと思われるので、本尊が新しく見えるのは、火災の後で塗り直しをされた可能性もある。真偽の程は本尊を見る限りにおいて不明といわざるをえない。

#### 四七、薬師如来座像

一体

所有者 海林山興長寺

所在地 東町

時代 室町時代後期

像高 一〇三センチ

十二神将をつれた薬師如来像であるが、全体の印象が綺麗すぎて、一見では江戸時代ぐらいの制作かと思える。しかし衣紋のながれや像自体の持つ重量感等に見るべきものがあり、本尊よりも古

い室町時代の作品と考えるべきであろう。



写308 葉師如来座像

四八、聖観音座像

一体

所有者 独秀山大寧寺

所在地 切浜

時代 江戸時代初期

像高 三八センチ

大寧寺の本尊で通形のものではある。実質的な開山である当山三世の最獄元良禪師が本尊としてと考えるのが一番可能性としては高いと考えてい

る。江戸時代初期の作と考えられるが、聖観音の台座部分に岩石を用いるなど、まだ中世風の残存もあり、戦国時代から桃山期の可能性も否定出来ない。



写309 聖観音座像

四九、絹本着色 伯英徳俊和尚図

一幅

所有者 独秀山大寧寺

所在地 切浜

時代 室町時代中期

法量 一一・五×五六センチ

頂相の様式としては通形のものであるが、江戸時代の形式的なものとは違って、室町時代のもの



は「よびかけ」てくるような動きに特色がある。絹本に一部修理の跡があるが、それは江戸時代末の修理と思われる。切金は使用せず、膠塗りの上から金箔をのせて切金風に見せた技法を使用している。一部に盛り上げ文様の部分がある。



写310 伯英徳俊和尚図

五〇、絹本着色 最獄元良禪師図 一幅

所有者 独秀山大寧寺

所在地 切浜

時代 江戸時代初期

法量 一二八・七×九四・三センチメートル

描かれたのは江戸時代初期の明暦頃と思われる

が、江戸時代の整った絹織物でもなく室町時代の荒い絹でもない。縦糸が細かい縮みがある織物で桃山時代の織物の可能性が強い。背後に描かれる曲糸に懸かった袈裟が、一枚文様のものを使用していることが目立つ特徴であるが、他は通形の頂相画である。



写311 最獄元良禪師図

五一、最獄元良禪師像 一体

所有者 独秀山大寧寺

所在地 切浜

時代 江戸時代前期

元禄七年（一六九四）

像高 八六センチ  
作者 朝慶



写312 最獄元良禪師像

大寧寺には開山伯英徳俊像と同様の形式と大きさをもち座像として、三世の最獄元良禪師像がある。寄木の塑像の頂相であるが、体内に銘が残されており、そこには

最獄禪師

大仏師 朝慶作

元禄七年甲戌

とある。江戸時代前期の元禄七年（一六九四）に作られたことがわかる。またこの像の他にも、大

興禪師と考えられる塑像（像高六八センチ）と、開山伯英徳俊像（像高八六センチ・定教作）があつて、本尊を中心に四体の像が配置されている。

五二、絹本着色 仏性通応禪師図 一幅

所有者 独秀山大寧寺

所在地 切浜

時代 享保十七年（一七三二）

江戸時代中期

法量 一一・二×五二センチ



写313 仏性通応禪師図

享保歳在壬子初夏の銘がある。当山五世の仏性通応禪師は正徳元年に死去しているので、没後二

一年後の享保十七年に描かれたことがわかる。興  
幅寺別当二品尊胎親王の讃、および

通応禪師頂相 木下倉部郎俊長筆

の裏書きも残っている。

五三、釈迦如来座像

一体

所有者 峯雲山長養寺

所在地 奥須井

時代 江戸時代前期

像高 三五センチ  
メートル



写314 釈迦如来座像

南禅寺派円通寺末寺の長養寺の本尊は、開山当

初のみまで現在に至っているようである。開山は  
寛文年中から享保にかけてと考えられるから、当  
本尊もその頃の作ということになる。ただし元は  
真言宗智積院と称していたと伝承されているよう  
に、古い時代の記録はないので不明な点も多い。  
本像の顔の部分のみが黒く、他は金色になっている  
のは、本来が全部黒色であったものを、傷みが  
ひどくなりすぎたので、金色のスプレー塗料を吹  
きつけたためである。

五四、沢庵和尚書簡

一幅

所有者 峯雲山長養寺

所在地 奥須井

時代 江戸時代前期

法量 四一・四×一五・二センチ  
メートル

当地区には禅宗の寺院が多いことから、沢庵  
和尚に関するものが幾つか拝見出来る。この沢庵  
和尚書簡も、箱書の裏銘に



写315 沢庵和尚書簡

昭和二年九月上完

紫野現聚光院住随応

山謹誌

とあって、昭和二年に京都の聚光院より長養寺に贈られたものである。沢庵和尚のものである。沢庵和尚は、書の専門家にもかかわらず、書のないが、筆の動きに勢いと品位が感じられ、全体として力強い作例

と思える。

五五、小城十二所神社所蔵の懸け仏について

竹野町小城には、小さい神社ではあるが古い懸け仏を所蔵する十二所神社がある。神社自体はど



(薬師如来)



(阿弥陀如来)

写316 十二所神社懸け仏 (小城)



(十一面観音菩薩)



(千手観音菩薩)

こにもある小社で、小城の少し山に分け入ったところであり、いかにも魂の鎮座するのに適当な雰囲気を感じさせ、古くからの地主神を祀っている小社である。

この十二所神社の名前でもお気づきであろうが、十二所の名の由来は当然のことながら熊野十二所権現に由来している。そこでまず熊野十二所の概略を先に説明してから、この懸け仏の話に入りたいと思う。

熊野信仰は、熊野本宮・新宮・那智の三社を中心として成立した修験道信仰であるが、この三社を相互に結びつけた修験道集団は、平安時代中期頃には成立していたらしく、平安時代後期には全国的な大信仰圏を得ていた。

熊野信仰が熊野山伏と吉野・大峰山伏との連携により、平安時代後期には強大な勢力を誇っていたことは、平安時代の公家の日記等に記入された内容から十分に説明できる。しかし全国津々浦々



(龍樹菩薩)



(地藏菩薩)

まで熊野神社があり、現在の日本の神社数でも全国一の多さを誇るといふ他愛もない事実でも、この熊野社の勢力の大きさを証明できよう。当然山深い竹野町においてもその影響は強かったと考えられる。この十二所神社も、その神社名から推定できるように、熊野十二所権現をお祀りしている神社であるが、その熊野十二所権現とは、表2に記入したように、三所権現と五所王子と四所明神とを合わせて十二所権現と称している。祭神よりも、それぞれの本地仏による信仰の方が強く、本地垂迹説の本家はここではなかったのかと思わせるほどである。特に本宮の本地仏阿弥陀如来の信仰では鎌倉期には熊野影向図を考察し、蟻の熊野詣と言われるように厚い信仰を得ていた。

熊野の神様たちの素性も確かなものである。本宮の家津御子大神は素戔鳴尊に、新宮の御子早玉大神は伊弉諾尊の唾から生まれた早玉之男神と黄津事解之男神に、那智の熊野夫須美大神は産霊神



(聖観音菩薩)



(如意輪観音菩薩)

表23 十二所権現と本地仏

以上四所明神といひ、以上合わせて十二所権現といひ。	米地金剛童子	両足尊	毘沙門天	一万宮 十万宮 一万宮・十万宮を一所とみなすことが一般的となっている。	国鉄樋尊	文殊菩薩	以上五所王子といひ。	子守宮	聖観音菩薩	以上三所権現といひ。	那智(結宮)	熊野夫須美大神	千手観音菩薩
	飛行夜叉	大戸道尊	不動明王		豊勘淳尊	普賢菩薩		若宮(若一王子)	天照大神		十一面観音菩薩	新宮(証誠殿)	家津御子大神
	飛行夜叉	泥土煮尊	釈迦如来	聖賢菩薩	龍樹菩薩	地蔵菩薩	禪師宮	天忍穗耳尊	如意輪観音菩薩				
							聖宮	彦火々出見尊					
							毘宮						
							子守宮						



(釈迦如来)



(文殊菩薩と普賢菩薩)

伊弉冊面とされている。三所権現以外はいくつかの異説があるが、一応のところは最も一般的な例を採り上げて考えていきたい。

今回調査で明らかになったのは、寸法がまちまちではあるけれども、懸仏一枚、鏡一枚、押出仏一枚の計一三点である。ただし、これらの中にも理屈上不合理と思えるものもあって、必ずしも一三点であるとは断定はできない。しかし事後の調査もかなわない今となつては、その時の記録と写真と記憶から判定せざるをえない。そこで調査時点では不明であつた像名等を調査後の判明分を含めて述べていきたい。

先に述べた熊野十二所権現の順序に従つて発見されたものを並べてみた。またその懸仏の鏡部分の大きさ、および、像名決定の根拠を示すと、次のようになる。



表24 懸け仏一覽

別	鏡	本地仏	直径 単位cm	群	像名決定の根拠	時代
一	本宮	阿弥陀如来	二五・〇	A群	弥陀定印	室町前期
二	新宮	薬師如来	一五・〇	D群	薬壺なし阿闍と思われる	戦国桃山
三	那智	千手観音菩薩	二五・〇	A群	像形	室町前期
四	若宮	十一面観音菩薩	二一・〇	B群	聖観音と変わらず。頭部の形	室町前期
五	禪師宮	地藏菩薩	一五・〇	D群	声聞形宝珠錫杖の跡	戦国桃山
六	聖宮	龍樹菩薩	一一・〇		合掌・僧形／鏡部分は無	戦国桃山
七	児宮	如意輪観音菩薩	一八・〇	C群	像形	室町後期
八	子守宮	聖観音菩薩	二二・〇	B群	水瓶	室町前期
九	一万宮	文殊菩薩	二二・〇	B群	智剣と蓮華から五字文殊形	室町前期
十	十万宮	普賢菩薩			存在せず	
十一	勧請十五所	釈迦如来	一七・〇×一四・五		釈迦三尊形式・押出仏	江戸中期
十二	飛行夜叉	不動明王	一五・五	D群	像形	戦国桃山
十三	米地金剛童子	毘沙門天	一八・〇	C群	宝塔	室町後期
十四	鏡		八・〇			江戸後期

以上の通りである。



(毘沙門天)



(不動明王)

しかし、像容名を決定するには未だ確かな証拠がない懸け仏もある。例えば、薬師は通常の薬壺をもつ形をとっていないし、四と八も観音とはすぐに推定できるが、ただちにそれが十一面観音であり、聖観音であるとは断定できない。特に五と六は双方僧形であり、持物も地藏らしきものはあるが確定するほどのものでもなく、一応龍樹の方が合掌形をとる例が多いので像容から決定したというのが実情である。十の釈迦如来像にあたる懸け仏としては発見出来なかった、これは古くからなくなっていたものを、どうしても十二所に合わせようと努力したが、懸け仏としては入手が出来なかったであろう。後世に誰かが懸け仏の代用として、押出仏の釈迦像を施入したのと考えてよからう。

大きさも最大二五センチ(A群)から一五センチ(D群)までであるが、これらの総てが一括して製作納入されたものではない。当然当初は大きさも揃っ



(鏡)

ていたものであろうが、時代の変遷か、実用に使用されたためか、徐々に行方不明の懸け仏が出てきたのであろう。何かをきっかけにして、それら不明となった懸け仏の補充が、何回となく行なわれたと考えられる。そのことを裏付けるのが金属の質の面からの考察である。金属の質の感じからは、室町時代初頭（南北朝時代まで遡れる可能性はあるが）から室町時代後期にかけてのものと考えられる。二五・二二・一八・一五・一一センチの大きさに分けられるが、この中で当初のものと考え

えられる二五センチと二二センチのA群とB群の懸け仏は、やはり室町時代前期頃の制作となり、十八センチは室町時代中後期、十五センチは戦国時代から桃山時代、一一センチの鏡は江戸時代中期頃の制作になるものと考えている。何百年もかけて欠損していた懸け仏を、次々に追加購入したもので、常に十二所権現社の名に合せようと努力されてきた地元の人々の努力の足跡が感じられて、文化財としてだけでなく、人間の文化に対する営みの歴史として、貴重な遺産であるといわねばならない。

表25 絵画・彫刻調査寺社一覽表

地圖No	山号寺院名	宗派	本尊名及尊名等	種別	地区名	製作年代	備考	掲載No
1	円通山随音寺	臨濟宗	聖觀音菩薩坐像	彫刻	須野谷	江戸時代中期	本尊	1
2	瑠璃山満願寺	臨濟宗	薬師如来坐像 阿弥陀如来立像	彫刻	坊岡	江戸時代末期	本尊	2
3	峰山 蓮華寺	真言宗	十一面觀音菩薩立像 大般若經・六百卷 大日如来図	彫刻	轟	室町時代初期	本尊	7
4	萬年山円通寺	臨濟宗	華嚴釈迦如来坐像 白衣觀音図	彫刻	須谷	江戸時代初期	本尊・応永三十五年・仏師定弁	14
			山名時義・時熙坐像 月庵・沢庵坐像	塑像		江戸時代初期		15・16
			天井画	絵画		江戸時代中期	板絵墨彩	17・18
			愛染明王図	絵画		鎌倉時代後期	絹本着色・重文クラス	9
			釈迦十六善神図	絵画		桃山時代	絹本着色	10
			高野四社明神図	絵画		江戸時代中期	紙本着色	11
			金・胎内界曼荼羅	絵画		江戸時代	紙本着色	12
			華嚴釈迦如来坐像	彫刻		江戸時代初期	紙本墨彩・雲谷等幡	13
			聖觀音菩薩坐像	彫刻		室町時代初期		14
			薬師如来坐像	彫刻		江戸時代初期		15
			阿弥陀如来立像	彫刻		江戸時代末期		16
			大般若經・六百卷	木版		江戸時代前期		17
			大日如来図	絵画		江戸時代		18
			十一面觀音菩薩立像	彫刻		江戸時代前期		19
			華嚴釈迦如来坐像	彫刻		江戸時代初期		20
			白衣觀音図	彫刻		江戸時代初期		21
			山名時義・時熙坐像	塑像		江戸時代初期		22
			月庵・沢庵坐像	塑像		江戸時代初期		23
			天井画	絵画		江戸時代中期	板絵墨彩	24



12	十二所神社	神道	懸け仏群	彫刻	小城	室町、江戸期		55
11	峯雲山長養寺	臨濟宗	沢庵和尚書簡 釈迦如来坐像	書簡 彫刻	奥須井	江戸時代前期	本尊	54
			仏性通応禪師図	絵画		江戸時代中期	絹本着色・享保十七年	53
			最獄元良禪師座像	彫刻		江戸時代前期	元禄七年・朝慶	52
			最獄元良禪師図	絵画		江戸時代初期	絹本着色	51
			伯英徳俊和尚図	絵画		室町時代中期	絹本着色	50
10	独秀山大寧寺	臨濟宗	聖観音菩薩坐像	彫刻	切浜	江戸時代初期	本尊	49
			薬師如来座像	彫刻		室町時代後期		48
9	海林山興長寺	時宗	阿弥陀如来立像	彫刻	東町	江戸時代末期	本尊・来迎三尊形式	47
			地獄図	絵画		江戸時代末期	紙本着色	46
			一心十界図	絵画		江戸時代末期	紙本着色	45
			十一面観音菩薩立像	彫刻		室町時代中期		44
			元・龍海寺本尊・聖観音、 (十一面千手観音立像)	秘仏	元・神通寺本尊・阿弥陀如来、秘仏			43
8	賀嶋山龍海寺	真言宗	聖観音菩薩坐像	彫刻	東町	江戸時代中期	紙本着色・法橋閣主	42
			蝦蟇・鉄拐図	絵画		江戸時代後期	紙本着色	42
			琴棋書画図	絵画		江戸時代中期	紙本着色	41
			竜虎の図	絵画		江戸時代中期	紙本着色・法橋閣主	40
7	円覚山少林寺	臨濟宗	聖観音菩薩坐像	彫刻	草飼	江戸時代中期	本尊	39
								38